

ワクチンのよしよし時刻

米製薬大手ファイザーなどが開発した新型コロナウイルスのワクチンが近く、承認される。国内で新型コロナの患者が確認されてから1年あまり。米国や英国からは約2カ月おくれたが、17日とも医療従事者から接種が始まることだ。臨床試験（治験）では高い有効性が報告され期待が高まるが、長期的な安全性など、まだわかつてない」ともある。

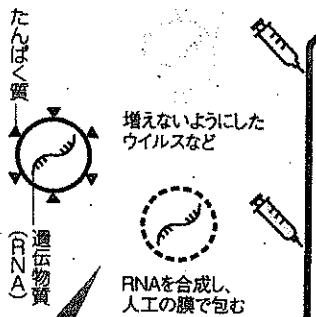
（野口憲太）▼1面参照

まず医療従事者から

発症予防予想超す「有効性95%」

今回のワクチンは「RNAワクチン」と呼ばれ、ウイルスの遺伝情報を使う。従来のワクチンに比べて早く開発できる。早く開発できる・安全性のさらなる検証が必要である。

本物のウイルスを使う技術開発に時間がかかる長い実績がある



RNAワクチン：本物のウイルスを使わない技術早く開発できる・安全性のさらなる検証が必要である

たとえば、「ワクチンには感染の有効性」が報告されている。事前の予想を超える高い有効性は、世界でも驚きをもって受け止められた。

ワクチンに期待される効果

	感染	発症化
実証は難しい	感染予防	重症化予防
偽薬	162人回 約1万8千人	ワクチン 8人回 約1万8千人
発症した人		
ワクチン	9人	1人
重症化を防ぐ効果も?		
ワクチンの有効性は?		
■+■=約20分の1→直すと 95%減少		
発症リスクが減った		

実際は、偽薬を接種したグループの発症率とワクチンを接種したグループの発症率を比べて計算する

「100人中95人防げる」は誤解

「有効性95%」は具体的に何をさしているのか。

治験では参加者を偽薬（生理食塩水）をうつぐるグループと回ワクチンをうつぐるグループに無作為に分類。2回目の

接種から7日目以降に発症した人の数を調べた。その結果△162人回8人だった。発症リスクが約20分の1になり、95人が

発症を防げる」というのは誤解で、正しくは「ワクチンを接種したときの発症率が、接種しない場合よりも95%減った」。治験のデータを使うと、△のうち95%にあたる154人はもしワクチンをうつしていれば発症を免れた可能性があった、と考えることができる。

接種後の健康状態把握へ報告求めらる

一方で、重要なのが副反応の検証だ。

な初期対応ができるよう手順を確認しておく必要があるだろう」と話す。

今後広く接種されていく中で、新たな副反応が判明する可能性もある。厚生労働省は、一般の人への接種に先行して17日にも始まる

の3割超の約290万人が1回目の接種を受けた。同国の科学研究所のチムの発表した論文では、優先接種が進む高齢層の感染者数や入院者数が若年層に比べて減ったと報告されている。同国からはワクチンに95%の効果があった、とする別の発表もある。

鹿児島大の西順一郎教授（感染症学）は「治験のデータと合致していて、よい報告ではある」としたうえで、「いまの段階ではさきりしていない。接種してからに訴えが出てくるのを冷静に待ちたい」と話す。

一方で、重要なのが副反応の検証だ。英国有り、南アフリカなどで接種された場合、変異ウイルスが確認される中、その対応も心配される。

夫婦からの時間が短いため、長期的な有効性と安全性の検証は今後も続ける必要がある。ファイザーはクチンが効きにくい別の変異ウイルスが今後、出現する可能性もある。

鹿児島大の西さんは「ワクチン接種が始まつたからすぐに収束、とはならないだろう。ワクチンはいろいろな対策の中の一つの手段であり、マスクの着用などの基本的な対策は引き続き必要だ」と話す。